



第1部

♪ ソナタ

L23 ホ長調
L103 ト長調
L240 イ長調
L343 二短調
L463 二長調

D. スカルラッティ（1685～1757）

♪ ラルゴ（オンブラマイフ）

G.F. ヘンデル（1685～1759）

♪ シチリアーナ

無伴奏ソナタ ト短調 BWV1001 より

J.S. バッハ（1685～1750）

♪ 協奏曲 イ短調 BWV1041

第1楽章 アレグロ（陽気に）
第2楽章 アンダンテ（ゆったりと）
第3楽章 アレグロ アッサイ（非常に楽しげに）

J.S. バッハ



第2部

♪ 変奏曲 イ長調

～パガニーニの思い出～

F. ショパン（1810～1849）

♪ ラ カンパネラ

F. リスト（1811～1886）

♪ モーゼ幻想曲

N. パガニーニ（1782～1840）

G. ロッシーニ オペラ「エジプトのモーゼ」より
『汝の星をちりばめた王座に』による序奏、主題と変奏曲

♪ パガニーニパーソナル

一柳 慧（1933～）

♪ イタリア組曲

I. ストラビンスキー（1882～1971）

序奏
セレナータ
タランテラ
ガボットと二つの変装
メヌエットとフィナーレ

演奏者プロフィール

マリンバ：明瀬 由武 AKASE Yoshitake

東京芸術大学音楽学部器楽科打楽器専攻卒業。各ラジオ・テレビに出演。ポピュラーの分野でも全国的に演奏活動を行う。NHK・FMにて新実 徳英「For Marimba」、西村 朗「ソロマリンバのための詩曲」他、数多くのマリンバ作品の初演をする。青年海外協力隊々員として中米コスタリカに派遣される。国立音楽院ソルフェージュ科教授、国立交響楽団打楽器奏者。在任中、国立劇場をはじめ各地にてリサイタルを行う。

現在、東京・つくばをはじめ各地にて演奏活動を行っている。

1998年CD「マリンバの贈り物～クリスマスの日～」

2007年CD「マリンバの贈り物パート2～星降る夜に～」

ピアノ：高瀬 奈美 TAKASE Nami

武蔵野音楽大学器楽科ピアノ専攻卒業。在学中より打楽器、声楽などの共演者として活躍。現在各地にてコンサートの企画、演奏活動を行っている。2002年よりバイオリン、フルート、声楽などのゲストを迎えて「夜想曲シリーズ」を展開。また2008年よりソロシリーズ「ピアノ叙情詩集」をスタートさせている。
2000年CD「ソナタとインターリュード」

編曲者

西邑 由記子 NISHIMURA Yukiko スカラッティ ソナタ
野口 道子 NOGUCHI Michiko ラルゴ（オンブラマイフ）
織田 英子 ORITA Eiko イタリア組曲（プルチネルラ）

マリンバ と ピアノによる

MIXMAGIC

ミックスマジックコンサート Vol.4

～イタリアの風 バロックから現代へ～

マリンバ 明瀬 由武

ピアノ 高瀬 奈美

2013年1月12日(土) 3:00PM (開場2:30PM)

MUSICASA

主催：久守文化基金

ミックスマジックコンサート・・・・

マリンバとピアノ。どちらも鍵盤を叩いて音を鳴らす楽器。

一見ぜんぜん似ていないけれど、よく似ている楽器・・・・。

マリンバは木の響きをパイプがひろげ、ピアノは金属ワイヤーの響きを木の響板がひろげる。

あべこべのようで、実は同じよう・・・・。

あまりに、その二つの楽器は、同じような素材を使って出来ているので、時々似通った音を出してお互いを邪魔してしまう。

なかなか合わせるのが難しい楽器同士でもあります。

でも、それが上手くいったときには、魔法の時が訪れます。

作曲家、編曲者、演奏者、それぞれの個性がミックスされ新しく生まれる時間を、聴きにきて下さった皆さんと共に楽しみたい・・・・。

そんな想いからミックスマジックコンサートを始めました。

どうぞ、魔法の時をお楽しみください。

～今日のプログラムについて～

16世紀～イタリアで起きたバロック音楽は、色々な楽器の発達・改良とともに、ソナタや協奏曲、オペラなどの新しい形式を生み出し、ヨーロッパ各地へ広がって行きました。

そして、楽器演奏法の発展にもつながり、後にニコロ・パガニーニをはじめとするヴィルトゥオーソ（超絶技巧の演奏者）の時代を生み出す素にもなっています。

今日のプログラムは、前半にバロック時代を代表する、偶然にも1685年に生まれた作曲家の作品を、後半にはヴィルトゥオーソの代名詞、パガニーニをモチーフに超絶技巧音楽の世界をお楽しみください。

第1部

♪ ソナタ

D. スカルラッティ

ドメニコ・スカルラッティはバロック時代の鍵盤楽器・チェンバロのために555曲ものソナタを書き、その技法発展のために寄与しました。彼の父、アレッサンドロ・スカルラッティもオペラ作曲家として活躍した人です。

今日は、その軽快で輝かしく優雅な趣を、マリンバとピアノによる演奏で味わってください。

♪ オンブラマイフ（ラルゴ）

G. ヘンデル

ドイツ生まれのヘンデルは、若い頃イタリアでオペラを学び、そこで成功し、後にイギリスで活躍した作曲家です。この曲（*Ombra mai fù*）は、イタリアのG. ボノンチーニ（1670～1747）のオペラをヘンデルが改作したと言われている、オペラ『セルセ』（*Serse, Xerxes*）の第1幕第1場の中で木陰への愛を歌ったアリアです。〈『*Ombra mai fù di vegetabile, cara ed amabile, soave più*・・・』『こんな木陰は今まで決してなかった緑の木陰 親しく、そして愛らしい、よりやさしい木陰は・・・』）現在オペラはほとんど上演されませんが、この曲は美しい小品として愛され、いろいろな楽器によって演奏されています。また、この曲の速度記号から『ラルゴ』として知られています。

♪ シチリアーナ（BWV1001）

J.S. バッハ

シチリアーナはイタリアシシリー島に由来し18世紀ヨーロッパに流行した6/8拍子、12/8拍子のゆったりとした舞曲で、付点音符の音型  が特徴的です。この曲は無伴奏バイオリンソナタ第一番の3曲目に演奏されます。なお、フルートのためのソナタ（BWV1031）2曲目のシチリアーナも有名です。

♪ 協奏曲 第一番 イ短調 (BWV1041)

J.S. バッハ

この協奏曲は J.S. バッハがヴィヴァルディをはじめとするイタリアの作曲家たちからも学んでいることを示しています。バッハはバイオリンのために 3 曲の協奏曲を書いたと言われていますが、彼らの協奏曲を手本として作った最初の協奏曲です。

イタリア的な明るさと北ドイツの厳格さを併せ持った格調の高い作品です。

13 第2部

♪ 変奏曲イ長調 ～パガニーニの思い出～

F. ショパン

ピアノの詩人といわれるポーランドの作曲家ショパンのこの作品は、1829 年にワルシャワを訪れたパガニーニの演奏会で、パガニーニ自身が作曲した《ヴェネツィアの謝肉祭 変奏曲 作品 10》を聴いたことを機に作曲されました。

アレグレットのイ長調で、8 分の 6 拍子によるこの変奏曲では、左手のオスティナート風の伴奏の上で右手が主題と 4 つの変奏を、つまり、左右の手の役割がパガニーニの作品に忠実なピアノ版となっています。(パガニーニの作品では、右手のボウイングでメロディーを、左手のピッツィカートでオスティナート風の伴奏を奏しています。)

なお、ショパンがピアノの高度なテクニックを駆使した「練習曲集」を作曲したのも、パガニーニの影響と言われています。

♪ ラ・カンパネラ

F. リスト

イタリア語で「鐘」という意味のこの曲は、パガニーニのヴァイオリン協奏曲第 2 番の第 3 楽章のロンド『ラ・カンパネラ (la Campanella)』の主題をもとに、リストがピアノのために作った『パガニーニによる大練習曲』の第 3 番です。

20 歳の頃にパガニーニの演奏を聴いて衝撃を受けたリストは、自分の音楽の方向性に開眼し、その後、ピアノによる超絶技巧の華麗な曲を数多く残しています。

♪ モーゼ幻想曲

N. パガニーニ

パガニーニは神がかり的なバイオリンのテクニックを持っていて、それまでの演奏では考えられなかったような表現で、前述の通り多くの作曲家に影響を与えています。また、優れた作品を残しています。

モーゼ幻想曲は『セビリアの理髪師』や『ウィリアムテル』などたくさんのおペラを作ったイタリアの作曲家 A. ロッシーニ (1792~1868) のオペラ『エジプトのモーゼ』(1818) を聴いた印象からバイオリンとオーケストラのために書いたと言われています。

♪ パガニーニパーソナル

一柳 慧

パガニーニの無伴奏バイオリンのためのカプリースの有名な主題がテーマになっている一種の変奏曲です。構成は通常の変奏曲と同じですが、曲が進むにつれて主題からどんどん遠ざかり、コードでまた主題の輪郭を取り戻していくように思われます。1982 年に岩城 宏之氏の打楽器リサイタルのために作曲されました。岩城は指揮者として知られていますが、私の大学の打楽器科の大先輩です。

♪ イタリア組曲

I. ストラビンスキー

ストラビンスキーは「春の祭典」や「火の鳥」などを書いた近代作曲家ですが、この「イタリア組曲」は 18 世紀イタリアの作曲家ペルゴレージ (1710~1736) の音楽を基にしたと言われており、どこかバロックの響きが感じられると思います。

ストラビンスキー自身がオーケストラのために書いた『ブルチネルラ』(1920 年) をバイオリンとピアノやチェロとピアノ用に編曲し (1932・3 年)、『イタリア組曲』と名付けました。今日はマリンバとピアノで、その雅な響きと現代的な感性がミックスした世界をお楽しみください。